

---

# 銃と能力と異世界旅

another

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銃と能力と異世界旅

### 【Nコード】

N2020W

### 【作者名】

another

### 【あらすじ】

俺は私立の大学に通う普通で普通な大学生。変わった所があるとすればちよつと妄想が過ぎる所かな。バイクでいつものように走らせていたらトラックにひかれ死んでしまい神様に会う次第。

「ごつめーん、ちよつとした手違いでさー、殺しちゃったんだ」  
神様の手違いで殺された俺はというとどうやら転生させられたようだ。

異世界で始まる冒険。銃と剣と魔法が入り乱れる日々。冒険を通して培われていく生きる術を駆使して生き残れ！これから俺は生き

残れるのか？不安すぎる日常がこれから始まるつとじていた



10mほど投げ飛ばされた。

俺は体験したことのない不安と絶望そして親への申し訳なさにさ  
いなまれていた。

中学時代には些細なことで喧嘩し、反発して家を出たこともある  
俺のことは見放さずに育ててくれ、そして大学の授業料、そしてそ  
の他にもろもろの費用だって出してくれたのに、何も返せずに死ぬな  
んで……。

俺は投げ出された刹那にそんなことを想っていた。

だが無情にも現実が迫ってくる

俺の体から何かが抜けて、冷えてくる感覚に襲われる

母……さん……

そして俺は死んだか……と思えばまだなんか意識があるので眼  
を開くと知らない天井があった

「知らない天井だ」

「はいはい、テンプレごちそうさま」

「じゃあ、二次創作とかでよく見るあんな感じなのかい？」

「ものわかりがいいじゃないか」

起き上がり声のする方向に顔を向けると普通としかいいようがな  
いような女の神様がそこに座っていた。

「普通っていうな！！これでも神様なんだぞ！！」

「うわー、神様だー（棒）」

「このまま殺してしまうのも、いいかな……？」

「すいませんでした」

全速力で教授相手に鍛え上げたスライディング土下座を披露する

「まあこっちの手違いだから怒るに怒れないんだけどね」

「はあ？それはどういう・・・」

「ごつめーん、ちよつとした手違いで殺しちゃった」

「ちよつとした、で済むなら警察いらさないだよ」

「そうだよねー、そんな君に朗報だよ。なんとなんとすごい特典つき  
の異世界旅にご招待なんて言うのがあるんだけどどうかな？」

「いや、普通に今の所に戻りたいよ」

「いやいや、それは無理という物だ若人よ。まあ規則だから勘弁してよ」

「本音出すなよ。親がこれから不自由なく生活していけるなら俺は何も言わないから。とりあえず不自由しないという保証を俺にくれ」  
「そりや保障するよ？なんたつて神様だからね。それよりも君は禁書は好きかな？」

「まあ厨二心をくすぐりますよね。」

「ほうほう、キングダムハーツは好きかな？」

「あれはやりこみましたよ、鎧男倒すのにどれだけ苦労したことか」

「ふーん、なるほど銃火器はどうだい？」

「無骨なデザインが好きです。」

「よし、決定だ！君には禁書のオリジナル能力とキングダムハーツのアルテマウェポンといつでもどこでもどれでも好きなだけ撃てる銃火器の詰まったジェラルミンケースをプレゼントしよう」

「・・・もう一声」

「だめ」

「・・・損害賠償を求めろ」

「ぐつ・・・いくら能力行使しても大丈夫な頭脳と、人間の限界を  
超えた肉体！これでいいかい！？」

「まあまあかな。」

僕の言葉を聞いて一喜一憂できるこの人の神経が羨ましく思えてくる。

「よっし！じゃあ早速送るからね。異世界の旅楽しんできてね！！  
いつてらっしやーい！」

その言葉の直後に足元に黒い穴が現れ重力に従い落下する

「え？ちよ、おまつ！！ガチふざけんなってええええええええええ！！」

## 目覚めは試験管の中で

「ボゴツ？ボゴゴゴゴゴゴゴ？（あれ？目の前が霞んでる？」

「眼が……………た……………ね」

「（なんて言ってるんだろっ）」

「……………」……………いちよ……………

……………てね

緑色が支配する視界の中で声からして女性と思われる人影が何かを操作する

水が排出され始める。水が抜けきるとガラスが開き目の前の人物がしゃべり始める

「あなたの名前は？」

「？」

良くわからない。というか音として認識できるけど意味がわからない感じがした。

聞き取りやすいフランス語みたいなの

「もう一度聞くよ？あなたの名前は？」

ああ、名前を聞いているのか。やっとわかったよ  
ぱっとこの名前が浮かぶ

「俺の名前はD-23SAだ」

「よし、成功ね！」

ガッツポーズを決める謎の研究者A

だが、この謎の研究者AはただのAではない。



女性らしく小柄な体系だがそれを裏切るように大きい女性の象徴に運動不足による筋肉の不足によりより女性らしい肉体。眼福眼福研究熱心なのか髪がかなり傷んでいるそれに結構風呂には入っていないようだ。すごく・・・臭います・・・。それにしてもとっさに口から出たのが数字とアルファベットだとは・・・。

「研究の甲斐があつたわ！ふふふ、これまでの弱い魂とは違って強靱な魂をこの特別仕様の素体に定着させて成功だつたわ！！ふふふ、ふはははははははは！！」

なんだろう、この人から神様と同じにおいがする。

なんて言うか人の事を考えないフリーダムな人間な臭いがするぜ

「さあさあ！そんな所にいたって実験はできないわ！早く出て実験するわよ」

さて、地獄の事件の始まりだ！

壮絶な実験だつた。何でも俺の体は特別仕様らしい。

まあ1つ2つ程度だつたけど。組み込むのが大変な作業らしい。

1つ目の仕組みといえば。千機眼という特殊な目らしい。

普通人間の眼というのは焦点が合っている部分以外あまり見えてい

ない。

語弊があるかもしれないので訂正しておくが見えてないわけではない。見えないわけではない。

この千機眼というのは普通の人間では焦点以外がぼやける所だがこの目はぼやけるどころかほぼクリアに見える。つまり視界があり得ないほど広いのだ。ほぼ真後ろでない限り・・・いや体が反応できる限りこの目にはほぼ（・・・）死角はないと言える。補足だがこの目を所有する人物たちは大体脳のリミットが最初からない（・・・）からこのように眼の捉える情報を正確に処理し続けることができるのだそうだ

2つ目は普通にナノマシンによる怪我などの再生だ。

僕の体には靈樹れいじゅの枝という物も組み込まれている

この世界には靈樹と呼ばれる靈的というか魔力が多分に含まれた樹が4か所あり、そのうちの一本から伐採したものらしい。

引き続き説明するが詳しい構造なんかは知らないが、靈樹れいじゅと呼ばれる靈的なエネルギーを持つ樹の枝をエネルギー源とし、再生などの活動をするらしい。まあありがたい。

この二つがしっかりと稼働しているかどうかの実験だったが壮絶だった。四方八方から迫ってくる矢をよけ続ける事。体に刺さったりすればその傷をナノマシンが即修復し実験が続けられる。

この実験を永遠8時間だ

そして、内部の損傷が修復されるか試されること10時間。近くで捕まえた巨体モンスター「オーク」10匹達の相手をさせられることになった。

相手というよりサンドバッグと表現するのが一番適切な表現だろう。ナノマシンには単一方向から指示を受ける事が出来る。その指示がナノマシンに伝わり体を支配することだってできる。

つまり俺はというとボツロボに殴られていた。

「はぁーい、自由になっちゃって『いいよー』」

ナノマシンによる攻撃制限が解除されたのか自分の力で立つことができる。

生き物を殺すのに抵抗があるけどこれ以上やられるのはしゃくだからなあ……

「ちなみにオークの弱点は頭よ」

「どうすれつつんじゃ!」

「そんなの自分の体を信じなさい」

オークが振りかぶり、腕を下ろしてくるタイミングで腕を伝い肩のり顎を一突き。

メギヤツ

肉を断ち、骨を砕く。

一撃だけでは絶命しない。巨体故の苦しみを味わうオーク。

肩からすぐそばにいるオークに飛び乗り腰のひねりと手刀にひねりを加えつつ目に一撃をたたき込む。脳へと達する一撃だったらしくすぐに倒れ込みそうになるがすぐに肩に飛び乗り目への一撃を加えるという作業を続けているとすぐにオークの死体だらけになってしまった。

「うつぶ……うげえええ……」

振り返るとオークの死体の山。胃液をはきだし、多少気分が晴れる

がやはり生物の死体っていうのは気持ち悪くなるらしい。それも自分の手で殺したんだ……。  
小声でごめん。といいつつ実験場を出る。

「やっぱり私の発明はすごいな。もうこんなことしなくていいから大丈夫だよ。」

「それは助かる」

「お風呂に入っておいでよ。血だらけじゃ気分悪いっしょ？」  
「ありがとう……。」

カポーン。

まさにそんな擬音が鳴りそうなほど和風な風呂。

「はあくどつかの人が言った風呂はリリンが生み出した文化の極み……ってのもあながち間違いじゃなかったな」

「ここに着替え置いておくよ。」

そういえば脱衣所にて姿見にて俺の姿を見ると。あの研究者よりも身長が頭一つ半程高い。約180cmちよつとだと思う。

だけどバストは……言うことがない。一言でいえば大きいです。なんて言うか俺の好みを体現したかのような容姿だ。

目は切れ長のつり目でスツと通った鼻筋に若干赤色のさす唇がなんというか妖艶という感じを醸し出している。合う服ないんじゃないか……？なんか胸の大きい人は服選びが大変だという話を聞いたこと

があるが本当なのだと身をもって体験するとは・・・

「ありがとうー」

すんすん

お？血なまぐさい臭いは取れたな。良かった染みついたらどうしようかと思った。

バシヤバシヤ

ガラガラ

「ん？なんなんd」「ごめんねー失礼するよー」ちよつと博士なんが入ってきてるのさ！」

「んゝ、なんとなくだよ。それとお風呂は久々だからね。」

そう言つて俺の体をペタペタと触り始める博士。

綺麗な女性に触ってもらえるのはいいんだけど多分スキンシップとかそういう目的じゃなくて絶対に研究とかそこらへんが目的だよな・

「うんうん！やっぱ私が作ったからには完璧だね。」

「自信ありげだね」

「自信ありげじゃなくてあるのだよ、ワトソン君」

「僕にはある胸を張ってるようにしか見えないよホームズ」

「あるんだから胸を張ってもいいじゃないかワトソン君」

「いいんじゃない？あるんだからね。ホームズ」

なんでこんな会話で気持ちが悪くんだろう・・・。

手が胸に移動しそうな所で俺は風呂からでて博士を沈めてから脱衣

所にて着替えを済ませ

博士が出てくるのを待ち、夕食を食べた。

だが一つここに問題がある。

着替えはあるのに何で寝るところがねえんだちくしょおおおおお  
おおお！！！！！

## 目覚めは試験管の中で（後書き）

### 用語解説

『霊樹（レイジュ）』

ネギまでいう世界樹的なアレ

『千機眼』

千の敵が見えるという特殊な眼のこと。

常人は脳にリミットがかかり、焦点以外はぼやけて見える所だがこの千機眼保持者はデフォルトで脳へのリミットが外れた状態なので視界情報いっぱいを処理することができるため視界が常人よりもけた外れに広い。死角はほぼない。

『型番（D-23SA）』

一番最初のアルファベットはシリーズ名をさす。

この場合Dシリーズの23番目ということになる。

数字の後ろに書いてあるアルファベットは特殊能力を持つか持たないかを示す。

初めてファンタジーというかオリジナル書くので誤字とか意見とかあればどしどし感想をお送りください。

設定集 - 世界編 -

まずどういいう世界かという点。

ファンタジー世界だ。

代表的な種族はエルフ、亜人種（人と何かの混ざった人々のこと）  
獣人は差別用語に入る。

続けるが、人間、特亜人種、その他種族といった所だ（エルフと何か又は何かと何かの混ざった人々で構成されている）。

それぞれの種族が個々の土地を持ち国を作っている。軽く紹介していこう。

『ボーレアス（北に位置する国）』

北に位置し、寒さ厳しい土地寒冷期が四大陸と比べて少し長い。  
国風は自由。もともと寒さ厳しく、この土地を訪れる人々が少ないため迎え方がわからないだけ。人間とは折り合いが悪い。

おもな産業は鉱石などの輸出産業に頼っている。  
人口の半分が特亜人種。

『ラティーン（東に位置する国）』

東に位置し、気候的には過ごしやすい土地。

時期により寒暖の差が激しいが過ごしやすいためとつばらの評判  
国風は来るもの拒まず去る者追わず。特亜人種と折り合いが悪い。  
友好的になろうという努力はしているものの人間が支配していた時代の負の遺産なのか折り合いが悪い

おもな産業は軍事産業、工業製品など。おもに輸出している。  
徴兵制がないため、自衛手段があまりない。風のうわさでは人工的に優秀な兵士を作り出す研究をしているとかしていないとか。  
人口の半分が人間である



『カウルス（西に位置する国）』

西に位置し、こちらも気候的に過ごしやすい土地  
同じく時期により寒暖の差が激しい。

国風はおおらか。折り合いが悪い対象はいない。少々人間とのいさ  
かひがある程度。

おおらかな国風が人気で人口はここが一番多い。

おもな産業は傭兵ビジネス。足の速い亜人が一番呼ばれる確率が高  
い。

人口の5分の3が亜人種

『オーティア（南に位置する国）』

南に位置し、とても暑い土地、暑い時期が長い。

国土の半分が森におおわれており、木の上に家を作りその中で暮ら  
す。

国風は排他的。エルフの住む森は秘境なためあまり移住者は歓迎さ  
れない。

おもな産業は農業系。野菜などを輸出している。国内自給率がすこ  
く高い。

人口の3分の2はエルフ。

『金に関すること』

この世界の通貨はGゴールド

この世界の物価は圧倒的に安い。

1G = 1円と変わらない。

1万円 = 1万Gとなる。

ちなみに商人の平均月収は3500Gぐらいとなっている

『ギルド制度』

最低10人にて結成可能。

4つの国の内どこかに拠点を置かなくてはならない。

ギルドマスターは半年はギルド本部にて書類と格闘することになっている。

サブギルドマスターでも可。だが基本ギルドマスターがやる。

ギルド員は入った時期に毎年査定を受ける事となる。査定で実力があり、上のランクでも生き残れるとなればランクアップ。実力不足となればランクダウンもあり得る完全実力主義の世界。

ちなみに弱い順に

F E D C B - A A A + - S S S + - S S  
S S S S + S S S

このように細かく16階級に分かれている。

これは冒険者や、傭兵の数が圧倒的に少ないため細分化し、そのランクに見合ったものをしてもらわないと数が減ってしまうため。

『奴隷制度』

基本的に軽微な犯罪であろうとも発見しとらえればその犯人は奴隷となり売りに出される。

奴隷には毎月国の決めた額を支払わなければならない。

凶悪犯は死刑または永遠に刑務所行きとなる。

犯罪の軽さが借金の重さと比例する。

スリをした場合5万G〜20万Gとなる。

『クラス分け』

皆の憧れは

前線に出る騎士、剣士が人気が高い。

その次に遠距離からの援護の銃士、魔法使いが次点で

人気がないに等しいのが暗殺者、神官である。  
他にも職業が出てくる可能性があるよ！

『職業』

冒険者・傭兵が人気が高く

商人、学者、公務従事者が次点。

## 強襲（前書き）

早速コメントありがとうございます。

タイトルは直しておきましたw

技術レベル順に並べると

高 低

ラ オカ ボ

ラ：ラティーン

オ：オーティア

カ：カウルス

ボ：ボーレアス

の順です。

あとクラス分けですが、騎士⇨ナイト 銃士⇨ガンナーとでも脳内変換していただけると助かります。できるだけ『銃士』や『騎士』などと書かないようにしますが、書いてしまった場合には脳内変換をお願いします。

コメ返信は以上です。

あと物価の設定が難しいので多少意見を頂ければと思っています。引き続きコメントお待ちしております。

## 強襲

俺が起動して1週間になる。ここ一週間の博士の行動は俺が起動してからどこかへ速達で手紙を出す。これだけだった、あとは普通に休みを謳歌するサラリーマンの様な休みっぷりだ

「っ!!」

「どうかしたの？」

「誰か来たよ。それも大勢」

「なんだ、もう来たのか……。逃げる準備するよ」

「逃げるっ たつてどこにさ」

「まあ国外逃亡だよ」

ドンドンドン

「ローレン博士!! お迎えにあがりました!!」

「騒がしいね……」

「騎士団か？ お迎えにあがりましたって何の事だよ」

「何を言うんだい？ 君のことだよ」

「だったら逃げないと!! 俺は着の身着のままでもいいけどあんたはそうじゃない! だから早くしたくしろ!!」

「ええっ……、わかったよ」

俺の気迫に押されて渋々仕度を始める博士  
てか名前ローレンだったなんだ……

俺は急いで玄関に向かい鍵をかけたうえ扉が開かないように引張る。

「ローレン博士！…いらっしやるんでしょう！？開けてくださいませんか！？」

うるさい奴だな・・・

なんでうるさい奴が隊長なんだろう？

「博士！…仕度は！？」

「後ちよつと・・・」

「しょうがない・・・扉を破壊しろ！！」「ハッ！！」「」

ドスン

「いっ！…！」

右耳のすぐそばに槍が貫通する。

ドスドス

「おいっ！ちよつ！…！」

次はわき腹と左足のすぐそばだ

「博士エエエエエエエエ！…！」

「準備オツケーだよ。あと君に」

といて投げてよこしてくるジエラルミンケース  
投げられたケースを受け取りつつ答える

「これは？」

「君宛に届いたのさ、一昨日だったかな」

とりあえず扉から離れつつ博士を小脇に抱え走り出す

「私だつて乙女なんだよ？もうちよつとロマンチックな抱え方してほしかったね」

「それが女相手に言うセリフかい！？」

「乙女はいつでも夢見るものだよ」

男（心情的に）の俺には分からないけど夢見るっていいことだと思う。

バギツ

「人工兵士がローレン博士を連れて逃げだそうとしている！！追うんだ！！」

「『オオー！！』『』『』」

もう追つて来たのか！！身体能力がいいとはいえ博士を抱えているから距離を開けて引き離せるかどうか・・・

家の廊下を右に曲がりそのつきあたりの窓に自分の背から飛び込む。

ガシャーン

「何やってんの！！ナノマシンがほぼ永久に直すって言っても限界があるんだよ！？」

「昔の偉い人は一宿一飯の恩を忘れないっていう言葉を残してる。その言葉に従うまでだ！！」

二階の窓から自分の身を先に落としつつ博士を自分の腹に乗せ衝撃が伝わるうとも怪我をしないという目的は守られる。行動続行だ

ドゴン

「うぐっ！」

「23号!!!」

型番だと長いので最近では23号と略されて呼ばれることが多い。今回もそのようです

窓から兵士Aが顔をのぞかせる

「待てえ!!!」

そう言っ窓から身を乗り出し兵士の放った槍が向かう先それは

博士だった

「博 ドスツ・・・土？」

「あ・・・あれ？刺さってる？」

「しゃべんな!!!これ以上しゃべると血が!!!」

「多分もうダメだよ・・・ガフツ!!!・・・じゃあ最後に命令を与えるから良く聞いてね?『自由に生きて』ね?」

血の海が広がり続ける

「嫌だよ・ヒッグ・・・博士のいない日々なんて、つまらないよお・・・博士え」

「情けない声を出さないの。あなたはも・・・う自由よ・・・?」

そう言っ博士の体は力が抜け、死体となった

「博士エエエエエエエエエエ!!!」



さっきの兵士が報告したのか騎士たちが俺を囲んでいる。

「貴様らアアアアアアアアアア！なんてだ！！なんてだアアアアアアアア！」

「人工兵士が暴れているぞ！手足を切り落としてでも押えろ！！」

脳内で作りかけの方程式をリミット解除された脳をフル回転させ急速に作り上げる。

次の瞬間

取り囲んでいた騎士全員が弾け飛んだ。

「ハア…………ハア…………博士……………」

博士の遺体に近寄り

「ごめん、ごめんね博士

俺のせいだ……俺なんかがここにいたせいだ」

ぽつり…………ぽつり…………ぽつぽつ……………ぽつぽつぽつ

ザー…………

23号の心情を表したかのような土砂降りの雨が降り始める

「博士えッ！こんな時代だから土葬ぐらいしかできないか……………」

納屋のカギを超能力で破壊し、その中にあるスコップを取り出して人間が入る大きさの墓穴を掘る。

「ごめんね、博士……ごめんね」

とうわごとのように呟きながら作業を続ける。

作業を終え博士の遺体を墓穴へ安置し、再び土を戻す

家に使われていた石を墓石の代わりとして設置し、銃を取り出す。

墓石に銃痕で名前を刻む

「故ローレン博士の墓」

「『自由に生きる』……か」

気付くと土砂降りの雨はやんでいた

心にぽっかりと穴があいたような消失感が襲う。

博士の存在感を物語っていた。

唐突な自分の死

突然の神からの転

生宣言

転生先で起こった驚愕の事実

同居相手の突

然の死

これらの事実がぐるぐると自分の頭の中を支配する。

自分がいなければ博士は死ななかったのではないかという疑念

博士の遺品を整理しに家に戻り数品だけ手に取り外に出る。

いつしか自分を責めるように歩きだした。

いつの間にか街道へと飛び出していたようだ  
ぼーっと辺りを見渡す。

辺りは博士の死を悼むように静まり返っていた

この静寂を破るように遠くの方で怒号が聞こえたので急いで走りだす  
怒号の内容が少し聞こえるようになるとともにその理由が判明する  
商人とその護衛一段がゴブリンの集団に襲われていたのだ

ゴブリンは単体では弱い生き物だが集団で集まると厄介なことこの  
上ない生物だ

その戦法は姑息極まりないらしい。

ケースからベネリM4を取り出しつつ最大速力でゴブリンの集団に  
近付く

ストックでゴブリンの集団を護衛集団からひきはがし密集した所で  
ぶっ放す

ズガンズガンズガン

ズパッ

護衛集団がラスト一匹とゴブリン集団を殲滅を同時に終えると同時  
に離れようと

足早に歩き始めるが

「ちよーっとまったあー!!」

ガシッ

「何？」

「何ってことはないだろ？お礼くらい言わせてくれてもいいじゃん  
その前に自己紹介からだな俺の名前はセキだ、クラスはナイトで冒  
険者だ。お前は？」

「名前はー．．．．．エル。エル・ローレンだ」

「へー、エルか。よろしくこっちの細身のエルフさんがセレティア  
だ」「セレティアです、ガンナーで冒険者してます。」「次にこっちの  
狼ワウルフ人くんがグrapper（格闘家のクラスの一部）のガラクね」「ガ  
ラクだ、紹介通りで、言わずもがな冒険者だ」で、その細身の猫  
人ワキヤットくんアサシンのライキ「ライキです、ご贖員に」

「どこへ向かってるんだ？」

「帝都だ。俺たちは護衛として雇われたんだ。礼といちゃんだけ  
ど乗ってく？」

「助かる」

そうして、俺は冒険者一行と一緒に帝都に向かうことにした。

## 強襲（後書き）

で、前書きでの続きですが

主人公のいる国はズバリ、ラティーンです。

ラティーンはもともと軍事開発を主眼とし、

人工兵士を開発するため予算を割いてきました。

このローレン博士もその研究者たちの一人です

で、開発されたのが主人公だったわけです。

ですが素体を開発した者のAIは開発されていましたが小型化されておらず乗せるにも苦労する。

だからその代りに魂を素体にぶち込むことによりAIの代わりとし、兵士として徴用しようというわけでした。

技術開発レベルは今の日本より進んでますが各国によっては明治自体中期ぐらいの国もあります。

以上で後書きを終わりたいと思います

質問などがあればコメントで送りくださいお待ちしております

帝都到着（前書き）

9 / 6 20 : 34 セリフの間違いを修正

## 帝都到着

帝都へと向かう馬車の中・・・

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「おい、お前。いい加減ふさぎこむのやめたらどうだ？」

突然話しかけてきたのは・・・確かガラクとかいうグループだ。中々に勘が鋭いらしいようだ。心のうちを見透かしたような発言だ

「何のことか・・・」

「お前の目を見ればわかる。だがな、それをまわりに知られないようにしろと言いたいんだ」

「まったく身に覚えがないね」

「往生際が悪いとはこのことか？。引きずるのも大概にしろ」

「なんだと・・・！」

言われてみればそうだ。

冒険者という職業がら死という物がいつ何時もついて回るものだ。

パーティメンバーであれ、自分であれそれは変わらない、不変の事実それを否定し、受け入れられないのであれば冒険者なんぞ勤まらないというものが・・・

「いや、そうだな。周りにモンスターがいないか見てくる」

「そうか」

そういうとゆっくりと体を起こし、ケースを手に持ち幌の縁に手を駆け勢いをつけ懸垂の要領で幌の上へと登る。ゆっくり考え事をし

たい時にはここが一番だ。

ローレン博士の研究所から持ってきた丈の足りないロープの裾から煙草を取り出しマッチで火をつけ煙草をふかしつつ灰に煙を送り込む

「ゴホッ！ゴホゴホ！」

「お〜い、どうしたんだ〜？」

御者台の方から顔をひよこりとのぞかせ、訪ねてくるセキ。

お前さんの名前通り咳きしてたんだよ。

「むせただけだ」

「あそう。」

そっけない返しをして戻っていくセキ。

煙草を口にくわえ仰向けになり空を仰ぐ

ジエラルミンケースに大量の銃器が入っているらしいがハッキリ言うと思わずらい……。何しにジエラルミンケースなんだ？もう少しマシなのがあったと思うんだが……？

それにしても……。もうちょっと早く敵の接近を察知できれば博士は死なずに済んだんじゃないか？もっと早く走ればなどと考えが堂々巡りを始めてすぐに煙草の火を消し、そこらへんの草むらに投げ込むと考えを止めるとために仮眠をとることにした。

目が覚めると、神様に君は死にました宣言された場所に行きついていた。



「やあ！目が覚めたかい？」

「久しぶりだな、神様」

「うん！久しぶりねえ。どうだい、異世界生活は？」

「出だしから最悪だね。初めてあった人物が死ぬとはね。こりゃ驚きだよ」

「ハハツ！そりゃ災難だったねー、君が僕の作ったジェラルミンケースが不満らしいから呼んであげたんだぜ？」

「ああ、不満だね。邪魔くさいよ、コレ。ちなみに礼は言わない。」「しょうがないなあ、別のに交換する？」

「そりゃいいね、ハンドガンはデザートイーグル2丁に、アサルトライフルはM4でオプションはグレネードとダットサイトで。あとそうだな、ミニガンぐらいでいいよ。いや、あと6連グレネードランチャーぐらいは欲しいかな。あとー・・・」

「ま、まだあるのかい？」

「あるさ、世界にある銃器を使えるつつたつて使うのはごく少数だろうから、制限して他のにしてもらった方が経済的すぎる」

「言えてるけどさー・・・」

「そうだな・・・。緋弾の奴で悪いけど単分子振動刀『ソニック』だっけ？あれを一振り。あれはやっぱりロマンだよ。手入れしなくても済むようにしてくれよ。長さは普通の刀ぐらいで頼む、あとはそうだな相棒のドウカデイかね。これぐらいでいいかな」

「そつちの要求はわかったけど、ジェラルミンからどうして武器の話に飛ぶんだい？」

「交換の話から飛んだんだろうが。ジェラルミンの話の続きするけど、空間を作つてそのリンクを自由自在に貼れるようにすればいいじゃないか？それなら取り出しやすいし、何より戦いやすい。ジェラルミンを持ったまま戦闘だなんてやつてられないからな」

「わかつたよ、そういう方向で調整するよ。やれやれまったく強欲だねえ」

「世界の銃器よりかはマシだろ」

「確かに僕の能力の半分近く食ってたのが4分の1ほどに収まったよ。」

「世界の銃器すげー(棒)」

「お？そろそろ起きた方がいいよ。君が寝てる間にすぐく走ってたみたいだ」

「んじゃあな。また来るかもしれないからその時は茶出してくれや」「二度とくんな」

そう言つて神様の奴は指を鳴らして俺の足元に最初と同じように黒い穴をあけた

「まあたかこのやるおおおおおおおおおお！！」

「ああー！あと、新しい弾に変えておいたからねー！……って聞こえてるわけないか」

そうして俺は再び黒い穴に落とされる羽目になった。

「ん……夕暮れか」

辺りは夜の迫る夕暮れだ。護衛達が騒がしい。

「おい、セキ！俺の干し肉とるな！！」

「んだよ、ケチケチすんなって」

「騒がしいぞ」

「聞いてくれエル。俺の干し肉をセキが取りやがった」

「べつつにいいじゃねーかよー、それぐれーよー」

喧嘩するほど仲がいいとはこのことだろうか？

喧嘩というか口論の原因はセキがガラクの干し肉を取ったことが原

困らしい。

「ほら、俺の干し肉やるから黙って食え」

「お前良く動く癖に小食だよな」

「良く動くぐらいいいじゃないか」

「ああ、そうそうこのペースでいけばもうすぐで帝都ブリランテつくぜ」

「そうか・・・」

「お前・・・ 悩みが吹っ切れたようだな」

「悩みなんざねえつつてんでしょうが」

「目を見ればわかる」

この会話を皮切りに俺たちはしやべらなくなった。

というかもう話すメンバーは大体固定だからだ。セキとガラクに時折俺といった所だ。エルフのお姉さんともうちよつと話したかったが、まあ町で会うことを期待しよう。

猫人のお兄さんは人当たりがいい人だったが、多少人見知りらしい。あと騒がしいのが苦手で大体エルフさんとしやべってるようだ。人間観察もとい、種族観察をしていると帝都への入口にある、関所についたようだ。

ただいま順番待ち中・・・

前の雇い主の馬車がようやく通過し、護衛たちの馬車の番だ

「通行証はあるか？」

「こちらになります、騎士様」

さりげない動作で御者がワイロを渡す

「うむ、確認した。通れ！」

「ありがとうございます」

御者がペこりと会釈し、その後馬車は町はずれの豪邸へと足を延ばすが、お願いしてギルド前で止めてもらいギルドの看板をたたくことにした。

## ギヤルゲー的展開は誰だって夢見るはずなんだ

馬車を降り再び馬車が走りだし、それを見えなくなるまで見送るとギルドの扉を開き中に入る。

むせかえるような酒の匂いに迎えられながら辺りを見渡していると声をかけられる

「そのの、キヨロキヨロしてる方ってもしかして登録してきたかたですか？」

「そうなんだ、頼める？」

「その前に質問があります。文字は書けますか？」

博士に文字は書けるか？と問われたこととがありその際かなり達筆にこつちの公用語バーバルス語を書いてやったことを思い出す。  
あーやばい涙でそう。

「バーバルス語でいいですか？」

「もちろんです。こちらの紙に名前とクラス名と年齢をご記入ください」

この異世界には5つの言葉が存在する。各地方に伝わる言葉と各国共通の言語『バーバルス語』と呼ばれる言語だ。バーバルス語・・・面倒だから略すが、このバルス語は英語に非常に似ている為比較的覚えやすいのが特徴となっている。普及してかなり年数がたつたため使う人が多くなってきている。

そんな回想もほどほどにし、紙に書き終わりその紙を手渡し、カウンター<sup>カウンター</sup>の奥に引っ込んでしまおう。  
何か悪いことしましたっけね？

ほどなくして水晶を手に戻ってくる

「この水晶は霊力又は魔力の有無を確認するための水晶です。それではこの水晶に手を当ててみてください」

「はあ」

言われる通りに手をかざす

「・・・！すごいですね。霊力もちでこれだけの量の人は珍しいです  
すね」

「へー、そうなんですかー」

「それでは次は・・・この水晶に手を当ててください」

水晶ごとに違う役割が当てられているようだ。

「はいはいーっと・・・」

手をかざしてほどなくすると、かざしている手の数センチ上に光の球が浮かび上がりその光の弾はカードの形を形作ると光は霧散した

「ハイ完成です！依頼を受ける際には左側に見えるボードから紙をはがしてください。」

「ああ、了解です」

「ですがあなたは受けられません」

「はあ！？どうしてですか！！」

バシンとカウンターをたたく

カウンターの女性は多少驚くが毅然とした態度を崩さない

「あなたに依頼を受けさせるわけにはいきません」

「訳は？」

「あなたの目は死に急ぐ者の目です。そんな目をした人をみすみす

死なすようなことはできません。」

「そうかい」

この人は優しい人だな・・・

勿論ギルドのためにならないからこういう風に言っているのだろうが今の自分には響いてくる。

数日前とはいえ人の死を引きずり続ける自分もどうかと思うが・・・

「話がそれましたが当ギルドはモンスターの素材を買い取りますので素材を手に入れた場合は持ち込んでくださって結構です。珍しい素材だった場合高価買取させていただきます」

「じゃあ、これを・・・」

「素材ですか？それならばこちらにどうぞ」

と言って通されたのがトレーのたくさんある部屋だった

そして今度こそ袖に手を入れどんどんオークの素材をトレーへと乗せていく

それを彼女は一瞬で判じ、そろばんをはじめて行く  
出し終え彼女のそろばんをはじめ終わるのを待つ

「終わりました！しめて、1700Gとなります」

その場で半銀貨17枚との交換になる

「ありがとうございますー！」

その掛け声を背にしギルドカードを手往來にまぎれ武器屋を探し  
ひた歩く。

ひたすら歩いて探していたが、見つからないのなんのって。  
防具屋と雑貨屋は見つけたけど武器屋が見つからないんだよ  
疲れたので小道に入った刹那身なりのいいお嬢さんとぶつかる

「あつ！あのつ！！助けてくださいっ！」

そう言つて俺の背中へと隠れるお嬢さん

そのお嬢さんを追つて奥の十字路の左側から現れる鎧の集団。  
話が見えてきたぞ、このお嬢さんは貴族か何かでちよつと市井に遊  
びに行きたくて抜けだしたらそれに勘付かれてこのざまといったと  
ころか・・・

などと考えていると先頭の隊長と思しき頭頂部の派手な人物がこち  
らに話しかけてくる

「おい貴様その方をこちらへ渡せ！」

「・・・」

「お願い助けて！！！」

が、しかしこのお嬢さんの態度だ。多少怯えの姿勢が見える。とい  
うことは近衛兵ではないのではないか？という疑問が浮かび上がっ  
てくるのだが、とりあえずこの人を助ける方向で行こう。  
恩赦くれるかも知れないからな！

となれば即行動だ！お嬢さんをお姫様だつこで抱きかかえる

「ぎゃっ！」



「首に手をまわして、しっかりつかまって」

可愛らしい声を上げ、顔が赤いがそんなことを気にせず左を向き勢いをつけ壁に向かいジャンプ！いわゆる三角飛びで建物の縁付近まで来ると最後に景気づけとばかりに1回転半ひねりで騎士達の顔は見れなかったが呆然と言った感じで上を見上げていた所で自身の視界から外れ着地する

お嬢さんをゆつくりと下ろすと服のしわを伸ばし始めた  
俺はゆつくりと傳くと謝罪の言葉を述べる

「先ほどの無礼な振る舞いをお許してください。どこかのさる高貴な方と存じ上げます。一介の冒険者たる私目の無礼な振る舞いをお許してくださいませ」

「構いせんわよ？今さっきの行動には驚きましたけれど」

「もう一回だけその無礼な振る舞いを許し頂けませんか？ここでは通りを歩くこともまかり通りません」

「っ！そ、そうねお願いしようかしら」

また顔が顔が赤くなる。この人俺のことを男と勘違いしているのではなかるうか？抱きかかえたときにわからなかったのだろうか？そんなことは置いておいてお嬢さんを再びお姫様だっこし、何軒か屋根を飛び回り適当な所で壁に手をつけゆつくりと降りる

「市井を見に來ただけだというに・・・ あっ、そうだわ！あなた、市井を案内してくださらない？」

「お嬢さん、それは冒険者たる私に対する依頼ですか？それともお願いですか？」

「うーん、じゃあそだね、依頼ってことにしておくわ」

「報酬は？」

「さすが冒険者・・・がめついわねえ、そうね銀貨50枚でどうか

しら？」

「多すぎます、案内程度ならこの町にすんで長らく住んだ者に頼んだ方がずっと良いでしょう。護衛ならその額で受けさせてもらいますが」

ハッキリ言つとこの町に来て数時間も立っていない自分では不安なのだ。

「なら、護衛つてことでいいわ。私は適当に見て回るから適当に歩いてきてね」

「その前に自己紹介しませんか？私の名前はエル・ローレン。あなたは？」

「私はフェルサ・ヘテロフォニー・インテロメッツォよフェルでいいわ」

冒険者デビューと共に初依頼が護衛とは・・・緊張するなあ。それにしても長い名前だ。王族か？

ローブの袖から一振りの刀を取り出す。  
拵えはいたつて普通だが鏢なしの漆塗りと思われる鞘が黒光りする。正直言つと凄く、かっこいいです。鯉口をすこしだけきり、刃を覗くと鎬の部分に溝があり、その部分は青く塗装されており、刃には刀独特の波紋が浮かんでいた。

そして刀を鞘に納めると右手に刀を持ち辺りを警戒するようにお嬢さんの右後ろにつく。

なぜ警護対象の右後ろにつくとかというと警護対象の進行方向に対し、道路側からの襲撃に対しふせぐためだと言われている。ドラマSPでこんなことを言っていたような気がする！たぶん

あー、襲撃されないといいけど

**ギヤルゲー的展開は誰だって夢見るはずなんだ（後書き）**

解説！教えて安々（銃声）

というわけで突然の解説コーナーです。

今回は金銭について、特にお金の種類ですね

半銅貨≡10円、銅貨≡100円、半銀貨≡100円、銀貨≡1000円、半金貨≡1万円、金貨≡10万といった順番になります。

以上解説コーナーでした

## 護衛と対話

(っはぁ〜・・・)

疲れてはいないが、溜息が出てしまう。

それはしょうがないものだと思える。考えても見てくれよ身なりのいいお嬢さんと曲がりなりにも、生物学的観点から見ても女の俺が歩いているんだ(一応ローブは身につけている)

それを見て襲いやすそうなのか良くスリや物乞いなどがわんさかやってくるそのため急遽予定にない もともとあつてないようなものだが 服を扱っている所へと足を向ける。

店に入るとすかさず店員が出てくるが手早く店内の物を物色し地味の典型と言えるような格好をさせそくさと料金を払い店を出る。その際にチップを渡すのを忘れないのはなぜだろう？

そしてぱつと市井の調査というかお忍び視察をすませるためお嬢さんをせかす

「ちょっと、そんなにせかさないでよっ」

「まったく・・・あんた全然わかってないな。スリにあれだけあつといてまだそんなこと言うのか？」

「別にいいじゃないスリぐらい」

「じゃあいいよ・・・」

言う言葉を失いお嬢さんの後についていく。その約2時間後ぐらいに俺は解放された。

「そうそう、たぶんまた来るからその時は頼むかもしれないから覚

悟しておきなさいね」

「嫌です、それでは失礼します」

二の句をたたきつけようとするが上質そうな布でできた小袋を渡される。小袋の中身は銀貨だった

五〇枚きっちりあるかきっちり確かめてからその場を去る

俺の最初の態度はどこへ行ったんだろう。まあ細けえこたあいいんだよ！

その日は宿に泊まり泥のように眠った。

そう、まるで水中のようにゆっくりと着実に体が落ちていく黒い空間をゆっくりと、着実にだが落ちていくそれを自覚できる。ゆっくりと落下していくとともに白い空間が見えてくる。地面が近づいてくると爆点の要領で体を回転させ着地

(また お前 か)

「そう、また僕だよ」

「まったく何度も呼び出すなよ。だんだん呼び出す周期が短くなってきたくないか？」

「いや？そんなことはないさ。それより君に用があるっていう人物がいるんだ。会って行きなよ」

「そのために呼び出したのか？」

「ぶっちゃけ」

「わかったよ・・・」

神がパチンと指を鳴らすとふよふよとゆっくりヒト玉が降りてくる  
俺はこの感覚を知ってる・・・たぶん

「やつほー久しぶり。」

(だと思った・・・)

「いやいや、いい感じにやさぐれてるね」  
「ええ、まあ。」

そりゃそうだ、この世界で懇意にしてもらっていた人物がいきなり  
死んだんだ。やさぐれない奴は余程のバカか幼子だけだろう

「私が死んだからって何も気にする必要はないんだぜ？」

「博士は・・・博士はあの兵士を恨んでないんですか？」

「ああ、気にしてないね。微塵も」

「殺されたんだぞ！！それも自分が！！」

「まあそうだね、だけど人は誰しも死ぬんだぜ？それがあの時だ  
つたってことだよ受け入れなよ。これは現実だぜ？」

「っ・・・」

「ふーん、この答えで踏ん切りがつかないんだね。そうそ  
うこつちに来てから思い出したことがあって君を呼んだんだよ。」

「へえ。」

「そっけないなあ、私は悲しいよ？まあいいや私の家があるだろ  
う？あの家には地下室があるんだけどそこに君専用の武器があるか  
らそれを君に進呈しよう」

「うるせーよこのクソアマが、人に悲しい思いさせといて上から目  
線とはどういふ脳味噌してんだ」

(ああ、ありがとっございます。)

「まあ死んじまったもんはしょうがないし勘弁してよ」

「ハイハイわかりましたよ」

「お話は終わったかにゃ〜?」

「土御門かよ」

「まあ気にすることじゃないにゃ〜」

「さてエルやんよ、最後に一つだけ能力をプレゼントしてやるにゃ〜」

「ああ、何から何まで助かるぜ。で今度の能力は?」

「それは博士の家でのお楽しみというわけで」

「いつものパターンだろわかて・・・るぜこんちくしょおおおおおおお!!!」

毎回の如く落下。

つまり等速直線運動。あれ?等加速度直線運動だったか?細かいこと(rly

益体のないことばかり考えながら黒い闇の中へと落ちて行った

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2020w/>

---

銃と能力と異世界旅

2011年10月9日15時01分発行